
紅神

優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅神

【コード】

N8012B

【作者名】

優

【あらすじ】

耕助は入学式の日、春日に出会う。とりあえず、そんなところから物語は始まる。

第一話 些細な事件

「それでは皆さん、自己紹介をお願いします。
まずは、中谷春日君から」

担任の先生が自己紹介する人を指名した。
すると、中谷春日と思われる人物が立ち上がり自己紹介を始めた。

「中谷春日です。

部活は入る予定はありません。

高校生活の目標は友達を百人作る事です。

俺は探偵をやっています。そして、俺の勤が正しければこの中に、
犯人がいます！

詳しい意味はいずれ俺が皆さんに話しましょう」

…クラスに沈黙が訪れた…

しかし、先生は自己紹介をしてください、と他の人を指名した。

…しばらく自己紹介が続いて、俺の番が来た。

「紅神耕助べにがみこうすけです。

よろしくお願いします」

簡潔に自己紹介をすませて、席に座った」

キーンコーン

授業が終わった。

それにしても何だったんだ？中谷春日という奴は…
受け狙いだっただのか？

探偵って言ってたけど…

それに、犯人がこの中にいるとはどういう意味なんだ？

深い意味はないのか？
ただの受け狙いか。

今日の学校は午前中帰りだった。

そして、帰りの会の途中…

「あ、あたしの財布がない」

その声を聞き、クラスの人が騒ぎだした。

そして、落ち着いた声で春日が話しはじめた。

「まあ、皆さん落ち着いてください。

俺が捜し出しましょう。あなたは、学校に来てから一度も教室を出
ていませんね？で、財布はどこにしまっておいたんですか？」

「カバンの横に袋を縛り付けていて、その袋のなかに財布をしまっ
ておきました」

「そうですか。見たところ袋ごと無くなっていますね。困ったな」

春日が困っていたようなので俺が話しはじめた

「財布の重さはどれくらいでしたか？」

「重さ？小銭が結構入っていてかなり重かったです」

「おい、そんなこと聞いてどうするんだ？え」と

「紅神耕助、まあゆっくり見てな。

ところで、最後に財布を見たのはいつですか？」

「はい、登校していたときに確認して、教室に着いたときに確認しました。

それからカバンをロッカーの上に置きました。
置いたときは確認しませんでした」

「つまり、誰にでも取るチャンスはあったわけだな？耕助！」

「チャンスはないぜ。

教室という空間でカバンから財布を取る事ができるのはみんなの視線がないとき。

俺はずっと教室にいたからわかるんだ。

あやしいやつが居れば俺が気付く」

「じゃあ、いつたい誰が？」

「冴えてないな、探偵さん。

彼女はカバンをロッカーの上に置いた。

そして、財布は結構重かった。

教室にあやしいやつは居なかった。

ここまで言えばわかるか？」

「そうか！ロッカーの裏か！」

「正解だ。じゃあ彼女に返してやれ、春日」

「了解！

よいしょ、うし！

はい、今度は気を付けてな」

「あの、二人ともありがとうございました」

もう帰る時間をとくに過ぎてしまったな。

「では皆さん。もう下校時間になりますのですみやかに帰ってください」

下校中

「お前つてすごいんだな！耕助！」

でかい声でいきなり声をかけられたので驚いた。

「なんだよ、びっくりしたじゃねえか。って春日！」

「悪い悪い、いつからロッカーの裏に財布があるって気が付いてた？」

「彼女が財布がないって言うてから少し経ったときだ」

「マジで？でも、財布の重さは関係あったのか？
耕助のヒントを頼りにして、ロッカーの裏だと思ったんだけど、財布の重さは関係ないんじゃないのか？」

「見なかったのか？」

カバンの横。袋をかけるところが壊れていたんだ。軽いものなら問題はないんだが、小銭混じりの財布を支える程の力はなかったのさ。

登校中は落ちなかったが、カバンを置いたときに落ちた。

登校は主に横揺れで、

カバンを置くときは縦に激しく揺れる。

つまり、登校中には落ちないんだ。激しく走らなければな」

「そうか、やっぱり耕助はすごいな！」

「春日も探偵なんだろう？」

「も、てことは耕助は探偵なのか？」

「まあ、探偵の端くれかな」

「はははははは」

第二話 初授業

俺の名前は紅神耕助べにがみこうすけ

探偵の端くれとでも言っておこう。

今年の春、俺はめでたく高校に入学した。

そして、入学式の次の日の学校で財布が無くなるという事件があった。

その時にこの中谷春日なかたにかすがに出会った。

春日は探偵らしい。

「ところで春日、自己紹介の時に言ったセリフはどういう意味なんだ？」

「ああ、そのことか。

探偵の耕助になら言えるかな？

実はな、俺は物心ついた時から不思議な力があるんだよ」

「不思議な力？」

「そう、でそれは、限られた空間にだけ反応する不思議な力。最近になって気が付いたんだけど、どうやら反応があった空間は近々事件が起きるっていう事らしいんだ」

「つまり、春日は探偵にならざるをえないってわけだな？」

「さすが耕助！
話が早いな。でも事件が起きるって言ったけど実はその犯人もわかるんだ」

「犯人もってことは犯行手段もわかるのか？」

「犯行手段はわからないんだ。
ただ犯人と事件が起こる場所しか…」

「ははは、なら問題ないな！
犯人がわかるならアリバイを解き、証拠を見つけりゃ犯人は終わりさ」

「だな、俺と耕助が居ればどんな事件でも解ける」

二人は学校へと向かっていた。
その足取りは軽く、話をしてる間に学校に着いていた。
二人は教室へ入った。

「おっ、名探偵コンビが仲良く登校してきたぜ！」

「学校が始まってまだ三日目だと言っのに俺たちは有名だな、春日」

「そつだな、耕助。」

でも、油断はするなよ？
近々このクラスで事件が起きるんだからな」

「わかってるよ、俺のことは心配しなくていいぞ」

キーンコーン

チャイムの音と同時に先生が教室に入ってきた。

「さあ、授業開始だ。

みんな席に着きなさい」

耕助と春日は席に着き、授業を受けた。

春日の言っていたこと…

限られた空間にだけ反応する不思議な力…

どうして春日にそんな力が…？

「こら！聞いているのかね！？」

「あつ、すいません。

ぼーっとしてました」

「顔でも洗ってきたらどうなんだい？

まったく、わしの話聞いていないとは困った生徒がいたもんだ」

耕助は不満そうに顔を洗いに行った。

耕助が顔を洗っているとチャイムが鳴った。

キーンコーン

やった、授業終了！

耕助は楽しそうに教室へ戻った。

「耕助、何やってんだよ。」
「始めての授業でいきなりぼーっとするなんて」

「いや、ちょっと考え事をな」

「インターナショナルパンチ！」

春日は耕助にとてつもない速さでパンチをした。

「痛つてえ！何すんだよ春日！」

「耕助がぼーっとしてるから起こしてやろうと思ってな」

「それは良いが、インターナショナルパンチってなんだよ」

「文字通り、国際的なパンチだ！」

「しょうがない、説明しよう。」

「インターナショナルパンチとは、国際的なパンチであり、日本人の一般的なパンチである。」

「わかったかな？」

「はあ、どうでも良いよ」

「どうでも良いとは何事だ！インターナショナルパンチはな」

俺は小一時間春日に説教され疲れて一日中寝てしまった。

放課後

「紅神耕助、至急職員室に来なさい。」

もう一度繰り返す。

紅神耕助、至急職員室に来なさい」

放送が鳴って耕助は寝起きのからだで職員室に向かった。

「お前は今日の授業はすべて欠席扱いだ！

一時間目はぼーっとしていて、顔を洗いに行っただけで帰ってこなかった。

二時間目以降はずっと爆睡！

やるきあるのか？

学校というものはな」

担任の先生に小一時間説教され疲れ果てた体で自分の家へ向かった。

帰り道

そもそも、一時間目は春日が妙なことを言ったからぼーっとしちゃったわけで、俺は悪くない。

たとえば俺が悪いにしても、二時間目以降は春日が説教したからだ！俺は悪くない。

まあ、いつか。

春日も悪気があって言ったわけじゃないだろうし。

今日のところは俺がすべて悪いということにしておこう。

第三話 事件

俺は春日と学校に来た。

春日と一緒に学校に来るのは入学式の次の日から。

春日が俺の家に迎えに来てくれるからだ。

今は四月十二日。

入学式の日から一週間が経った。

登校中

「本当に今日なんだな？」

「ああ、間違いない。

今日かならず俺等のクラスで事件が起きる」

「犯人は？」

耕助と春日は真剣に話をしていた。

二人はなぜか笑っていた。

「犯人はわからない。事件が起きたときに反応があるんだ」

「まあ、良いや。

俺の観察力で証拠を見つけだせれば、春日の反応で確信をもてる。
やっぱり俺と春日がいれば何も恐くない」

「油断だけはするなよ？」

「一瞬の油断が観察力を鈍らせる」

「おっ、たまには良いこと言うじゃねえか。」

成長したな、春日」

「当たり前じゃ〜ん。

俺は天下の春日さまだぜ？」

「調子に乗りすぎだ」

今日事件が起きるといふのに二人は余裕の表情を浮かべていた。

事件が起きるまでは…

事件発生

「証拠が無いんじゃ俺様は捕まえられないんじゃないか？

証拠不十分だろ？

それに犯行手段がわからないんだつたらなおさら俺以外にも人を殺せるやつが居るんじゃないのか？」

「……………つく」

なんなんだこいつ？

春日の反応から犯人はこいつ以外に考えられないのに…

証拠が一つもない…

それに殺す動機だつてない。

いったいどうやって殺したんだ？

俺の目の前で殺人が起こったのに…

「耕助……………ごめん」

「春日は悪くないよ。」

だから、謝らないでくれよ」

耕助と春日の顔からはいつもの余裕の表情が完全に消えていた。

「俺の名前は川上零^{かわかみれい}」

いつかまた殺人ゲームをしようぜ、耕助と春日くん」

そう言い残して川上零は煙幕と共に姿を消した…

耕助と春日は無くなった被害者に泣きながら謝った。

クラスのみんなも一緒に泣いて、クラスは悲しい空気で包まれた。

中には川上零を恨む者も多数いた。

川上零とは耕助や春日と同じクラスであり目立たなかった存在だ。

春日は犯行が起きたときにしか犯人がわからない。

そのため、二人は教室にいた人を観察して犯行を事前に防ごうとしていた。

事件が起きたときに零が犯人だと春日が言ったので、耕助は零のアリバイを解き、証拠を見つけたそうと自身の力をすべて使いきったつもりだった。

しかし、証拠は一つも出なかった。

教室という狭い空間にたくさんの人がいる時に堂々と殺人をしたので、耕助もあせり、本来の推理ができなかったのだ。

それでも、耕助はあきらめず証拠を探した。

二人は被害者の敵討ちができなかったことと、自分達が油断していたことを心から謝り、家へと帰った。

そして、二人は学校に顔をださなくなった…

学校にて

「今日も耕助と春日は休みか。

二人には心から同情するよ。

目の前でクラスメイトが殺されたのに、犯人を捕まえることができなかつたんだから。

明日、被害者のお葬式をやります。

このクラスの全員でお葬式に行きます。

耕助君と春日君には私から電話で伝えておきます。

それでは、今日はもう帰っていいです」

プルルルルルル

耕助の家に電話がかかってきた。

「はい、紅神耕助です」

「今から学校に来てくれないかな？

ちよつと話がしたくて」

耕助は元気の無い声で、今から学校に行くと返事をして、学校へと向かった。

学校に向かっている途中、春日に会った。

「耕助も、先生に呼ばれたのか？」

春日もかなり元気が無かった。

耕助は電話の内容を春日に伝えた。

春日も電話の内容を耕助に伝えて、二人は学校に着いた。

第四話 脅迫状

二人が学校に着いて、職員室に着くと担任の先生しかいなかった。

「来てくれたか。」

二人を呼んだのはちゃんとした理由があるんだ。

その理由を今から二人に話そう。

実は、昨日私の家に一通の手紙が届いたんだ。

内容は学校で殺人事件を行う。何人目で俺を捕まえることができるか？

そして、耕助と春日は必ず学校に来させろ。

という内容だったんだ。

始めはいたずらかと思っただが、なんだか怖くなってきてね。

この前学校で殺人事件が起きたばかりだから。

だから、二人には学校を守ってもらいたいんだ。頼む」

先生は真剣な眼差しで二人を見つめる。

すると、春日がしゃべり始めた。

「警察には連絡したんですか？」

俺たちより警察のほうがはるかにすぐれていますよ」

「警察には昨日連絡したんだがまともに話を聞いてくれなかった。だから、耕助君と春日君に頼んでいるんだ」

「どつするよ、耕助。」

このまま学校に来ないで家で落ち込んでたって俺たちのためにならないぜ？」

「そうだな、春日の言う通りだ。
じゃあ先生、俺等に任せて下さい！」

「二人ともありがとう。」

それと明日はみんなと一緒にお葬式に行くので少し早めに学校に来て下さい。」

二人はいつのまにか、いつもの余裕の表情を浮かべていた。

帰り道

「あ、そういえば手紙の送り主の名前を聞くの忘れたな」

「聞いたって無駄だと思うぜ？」

どうせ名前なんか書くはずがない。

気になるのは先生の家に直接手紙を入れたこと。

これは他の先生には見られたくないと言ふことでなんとなく意味がある。

学校の生徒を殺すと宣言していること。

これは先生の立場で考えれば、殺人は起きてほしくない。つまり、脅迫のためだと考えられる。

そして、俺と春日を必ず学校に来させる。

これに限っては意味がわからない。

犯人側からしたら、探偵の二人をわざわざ先生を脅迫してまで呼ぶのはおかしいと思わないか？

意味があるとすれば、一つだけだ。

俺等を殺すつもりだろう。それ以外に意味があるとは思えない。

犯人側からして危険人物である俺等を殺すとあればすべての意味が
つじつまがあう」

「そうだな、少しの可能性だが犯人は学校内に居るんじゃないか？」

「たしかに、それはありえる。」

俺や春日が探偵だと知っているやつは学校内にしかいないからな。もしくは犯人は学校内にいると考えるであろうことを逆手にとり、外部による犯行をするのかもしれない」

「やっぱり耕助はすごいな。」

いつも、考える早さが俺よりはるかに上だ」

「さあて、話はここまでにしよう。」

先生に送られてきた俺等に対する挑戦状の主を捕まえてやるうぜ」

「おう！一度挫折した人間は強いということを教えてやるうぜ」

二人は元気よく別れて、自分の家に帰っていった。

耕助宅

こんどこそは油断せず犯人を捕まえてやる。

そして、いつか川上零をこの手で捕まえてやる。

春日も元気を出したみたいだし、俺も全力で事件を推理する。

春日宅

こんどこそは油断せず犯人を捕まえてやる。

そして、いつか川上零をこの手で捕まえてやる。

耕助も元気を出したみたいだし、俺も全力で事件を推理する。

耕助の足手まといにならないように。

二人はほとんど同じことを考えていた。
川上零をいつか必ず捕まえるという使命を背負って…

第五話 二重人格

「久しぶり！みんな心配してたんだぜ？まあ、学校にきてくれて安心したよ」

声をかけてきたのは同じクラスの人だ。

久しぶりの学校だったからクラスメイトが心配して話しかけてくれたのだ。

しばらく話をしていると担任の先生が、お葬式に行くとみんなに言った。

お葬式

ごめんな。必ずお前を殺した犯人捕まえてやるからな。
！？

あれは……………川上零？

どうしてあいつがここに？

みんなにばれないように行ってみるか。

「おい、零。なんでお前がここにいるんだ？」

すると零は気の弱い声でしゃべり始めた。

「僕のせいで殺してしまったから。

僕がこの人を殺してしまったから。

君は紅神耕助君だよな？

君には言っておかなきゃいけないな。

僕は二重人格なんだ。

僕のもう一つの人格は冷酷で卑劣で人を殺すことをなんとも思わないやつなんだ。

君にお願がある。明日、川上探偵事務所に来てくれないか？

春日くんも連れてきていいからさ。

話はそこです。

あ、これ地図ね。一応渡しておくよ。」

そう言うと零はしずかにどこかへ向かっていった。

耕助は零が二重人格だと聞いて、どうしようか迷っていた。

表の人格はごく普通の人間だが裏の人格は冷酷で卑劣で人を殺すことをなんとも思わない人間。

どうにか、あいつの人格を取り除くことはできないだろうか？

翌日

「なあ春日、どうしたら二重人格は治せるんだ？」

「俺に聞いたってわからないぞ？」

医者に聞けばなにかわかるんじゃないのか？」

「そうだよな、まずは零に詳しい話を聞いてからだな」

二人は不安を抱きながらも零に渡された地図を見ながら川上探偵事務所に着いた。

「ここだな、入るぞ春日」

「ああ、行こう」

二人は中へ入っていった。

「耕助くん、春日くん待ってたよ。」

あいてる席に座って少しだけ待ってて」

そう言うと零は部屋から出ていった。

そして、二人は隣通しの席に座った。

二人は話をしながら待っていた。

三十分くらい待っていたら零が部屋に戻ってきた。

「ごめんね。遅くなっちゃって、ちよつと書類を整理してたんだ。じゃあいきなり本題に入ろうか。」

担任の先生に手紙を送ったのは僕なんだ。

耕助くんと春日くんに油断させないために。油断さえしなければ、僕を捕まえることができると思ったから。

いつ人格が変わるかわからないから君たちを挑発するような手紙を送ったんだ。

そして、殺人ゲームをやると言えば油断するはずがないと思った。

そして、お願いとは僕を殺してほしいんだ」

「そんなことできるわけないだろ？」

医者に聞けばなにかわかるかもしれないじゃないか。春日もそう思うだろ？」

「合法的に殺すためには正当防衛しか考えられないな」

「うん。僕もそう思ったんだ。」

だから、僕が警察に脅迫の電話をして、耕助君か春日くんをひとじちにして、警察が見えるようにひとじちにされていない方が僕を殺す。」

殺す道具として拳銃を用意した。

殺す場所も用意した。

殺す時間は早いほうがいい。

裏の人格になったらこの計画は終わりだから。

明日の朝でどうかな？」

「どうしてそんなことを言う？裏の人格は手術で取り除けるかもしれないのに。

どうして自分の死を簡単に受け入れることができるんだ？

そうは思わないか？春日」

「死ぬしか無いということ、俺には痛いほどよくわかる。かつて俺の兄貴がそうだったように」

「なに！？春日、兄貴がいたのか？」

「ああ、兄貴は殺してくれと俺に言ってきた。

兄貴は人が変わったように次々に人を殺していった。

兄貴も二重人格だったんだ。

兄貴は裏の人格を必死に押さえながら、苦しそうな声で俺に殺してくれとんでも言った。

俺はこの手で兄貴を殺してしまった。

兄貴が指名手配されていたから、俺が罪にとわれる事はなかった。

兄貴が人を殺し始めてから医者の人に人格を取り除いてくれと言っても指名手配犯だったからという理由で兄貴を治してはくれなかった。

俺は悔しかった。

できることなら兄貴を救いたかった」

「春日……………」

春日が泣きながら話していたので耕助は心配した。

「なんか、辛気臭い雰囲気になっちまったな」

ドン ドン ドン

部屋に銃声が鳴り響いた。

「……………」

春日を見ると心臓付近から血が大量に流れ出ていた。

「おい、春日！

返事をしろ！春日！

今、医者を呼んでやるからな」

「悪いけど、この部屋は妨害電波があるから電話は使えないよ。

そして春日が死ぬまでこの部屋から外には出さない。耕助、お前達は俺を消そうと考えていたな？甘いんじゃないのか？」

「ふざけるな！俺は春日を助ける！

もちろんお前の表の人格もな！」

「もうすぐ、春日は死ぬ。確か、人間の血は四リットルあって、二リットルなくなれば死ぬんじゃないか？」

「うるせえ！」

耕助は零に殴りかかったが、零は持っていた拳銃で耕助の右肩を撃

った。

「……………くそっ」

耕助は床に倒れこんだ。

「もう春日は死んだ。

念のため一発撃っておくか」

「やめる！」

耕助は左手をのばして零の足をつかんだが、零に蹴られて吹っ飛ばされた。

零は春日の心臓に銃口を向けて撃った。

「春日あああああ！」

「悔しければ俺と勝負しろ、場所はここだ。地図を渡してやろう。

言っておくが警察を呼んでも無駄だよ。

警察はここへは入ってこれない。

勝負はどちらかが死ぬまで行っ。

お前に拳銃を渡してやろう。

弾数は15発、これをもって地図に書いてあるところに来い」

「待て！」

零は煙幕と共に姿を消した。

「ごめんな、春日…」

耕助はその場で死んだように眠った…

最終話 紅神く永久不滅の名探偵く

目が覚めると春日はいなかった。

そして、俺は病院にいた。

「目が覚めたようですね」

「あ、看護婦さん。もう一人病院に運ばれてきませんでしたか？」

「はい、中谷春日という人が重傷で運ばれてきました。

奇跡的に一命を取り留めました、まだ眠っています」

「そうですか、ありがとうございます。

それと、俺の退院っていつですか？」

「退院？まだ無理ですよ。右肩を撃たれたのですから一週間は安静にしてないとダメですよ？」

「一週間ですか、わかりました」

携帯電話の時計を確認した。

撃たれてから八時間も経ったのか。

もうすぐ、日付が変わっちまう。

まあ、春日は助かるんだから喜ばないとな。

翌日

耕助はこっそりと病室から抜け出した。

部屋から出ると看護婦さんに見つかる危険性があったので、窓から直接外に出た。病室は一階だったので簡単に外に出ることができた。そして、零に渡された地図と拳銃を持って零のところへ向かった。

しばらく歩いていき、地図が示してある場所に辿り着いた。
古い館だ。

「よく来たな、紅神耕助。
さあ、中に入ってこい。」

俺はここで待っているぞ」

館の奥から零の声がする。

俺は指示どおり館の奥へと進んだ。

進んでいると大きな広場みたいなところに着いた。

「紅神耕助、今から俺と勝負だな。
ルールを説明しよう。」

この広場内でのサバイバルゲームだ。

広場から外には出られない仕組みになっている。

しかし、外からこの広場には入ってこれる。

ただし、一人までだ。

死んだ春日のために悴を用意してやったんだ。

魂だけでも通れるようにな！

ふははははははは

では、始めようか。

サバイバルゲームを」

その後、零は俺目がけて弾を撃った。俺はなんとかそれをかわし、
物陰に隠れた。

零が走ってくる音が聞こえたので、即座に次の物陰に向かって走り
ながら弾を二発撃った。

一発目は零の腕をかすめ、二発目は零の足に直撃した。

俺は続けて三発撃った。

三発の弾丸はすべて零に命中した。

「勝負あつたな、零」

「お前ごときに俺が負けると思つのか？」

そう言うと零は十四発続けて撃った。

その内の九発が俺の両腕と両足と腹と両耳と両肩に当たった。俺はその場に倒れた。

立つことができない。

すると、零が俺の方に歩いてきた。

「どうやら俺の勝ちのようだな。」

今のお前は動くことはおろか、引き金を引く力さえ残ってない。たとえ引き金を引くことができても俺のほうが早い」

「そのようだな、確かに引き金を引くことはできないけどお前を説得することはできる」

「笑わせるな、耕助。」

お前がいくら説得しようが俺の気持ちは変わらない」

「零、一つ聞きたいことがある。」

なんでお前はこんな勝負をするんだ？

前みたいに証拠を残さず完全犯罪で俺を殺せば良いのに、どうしてだ？」

「それはな、時間がないからだ。」

お前も知つてると思うが俺にはもう一つの人格がある。

そいつは俺と共に死ぬ覚悟だ。

お前を殺せば邪魔者がいなくなる。

邪魔者さえいなければ、もう一つの人格を取りのぞくことができる。だから、早めにお前を殺したいんだ。

完全犯罪をやるためにはトリックを考える時間が必要だからな」

「そういうことが、納得したぜ。

最後に一言、さよなら…零」

ダアアアーン！

広場に銃声が鳴り響いた。

零の心臓付近から血が流れ出ていた。

そして、いつのまにか広場の入り口に春日がいた。

「なん…だと？

春日…生きていたのか！

説得とは…時間…稼いだった…のか？」

「サンキュ、春日。

ちよっと、来るのが遅いんじゃないのか？」

「無茶言つなよ、重傷だったんだぜ？

生きてるだけでもすごいくらいだぜ？」

「零、ごめんな。

助けてあげられなかった。

裏の人格、生まれ変わったらしいやつになれよ？」

「くそ……つたれ……」
そう言い残して零は息を引き取った。

「おい、耕助！
さっさと病院に戻ろうぜ？」

「ああ、このままじゃ俺も死んじまうからな」

二人は広場を出て、病院へと向かった。
俺と春日は病院に戻るとすぐ看護婦さんに怒られた。
そして俺は病院内で、ある人に手紙を書いていた。

春日はのんきに携帯電話のゲームをやっていた。
不気味なくらい不死身なやつだ。
しかし、春日は零を殺したことを少し後悔しているようだ。
兄貴を救えなかったから、零だけは助けたかったんだろうな。
春日は俺を守るために零を殺した。

しかし俺は、病院に着いた日の夜、救急治療室へと運ばれた。

翌日

「入るぞ、耕助。」

あれ？耕助がいないぞ？」

「あの、すみません。」

この部屋にいた、紅神耕助くんはどこに行きましたか？」

「……………誠に申し訳ないんですが、昨日……………息を引き取りました……………」

「うそ……………だろ？」

春日の顔が一気に青ざめた。

「それで……………耕助様が……………これを渡してくれと言っておりました」

看護婦さんが渡したのは一通の手紙だった。

手紙の内容

『春日へ

春日が助かったのは心から喜ぶぜ。

重傷の春日に無理させちまって、本当にごめんな。

この手紙は病院に着いたときに春日宛てに書いたものだ。

どうやら、俺は死んじまうらしい。

血を流しすぎたみたいだな。

春日は俺よりも血を流したのに助かるんだから、やっぱりすごいよ。

元気出せよ？零を殺しちゃったことで元気無みたいだけど。

過ぎたことを悔やんでもしょうがないじゃん。これからのことを考

えろ、前向きにな。

最後にお願がある。

紅神の名を受け継いでくれないか？

俺の代わりに春日が事件を解くんだ。
頼んだぜ、名探偵。
今までありがとな

耕助より』

手紙を読み終わると春日は手紙を握り締め、泣いていた。
いつまでも…泣き続けた…涙が完全に渴ききるまで泣き続けた…

一年後

耕助、お前がいなくなってから今日が一年目だな。元気か？

こっちは元気だぜ！

学校の間みんなも元気でやってる！

それで、これから事件なんだ。

俺は反応がある場所を徹底的に見張って、事件を防ぐのが仕事なんだ。

今日は依頼があったから、行かなきゃいけないんだ。

また明日来るからな。

事件現場

「犯人はあなたですよね？社長。

証拠はあなたの靴下についた血です」

「逮捕だ！」

「あの、新聞記者の田中と申します。あなたの活躍を一面に載せたので、お名前と何か一言お願いします。」

すると、男がしゃべり始めた。

「いいですよ、自己紹介しましょう。」

俺の名前は紅神春日…

永久不滅の名探偵さ」

T H E
E N D

最終話 紅神く永久不滅の名探偵く（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、心から感謝します。ありがとうございます。ございます。改善点でもいいので評価を書いてくださるとありがたいです。書いてくださった評価は今後の作品の参考にします。最後にもう一度…ここまで読んでくださってありがとうございます。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8012b/>

紅神

2010年10月9日18時21分発行